史跡津山城跡二の丸東側石垣修理工事見学会資料

令和２年８月１日（土）津山市文化課

二の丸東側石垣の位置

津山城の東側は急峻な崖であり、その直下にある宮川が自然の防御線となっています。本丸から一段下がった東側には帯曲輪があります。この帯曲輪を構成するのは全長約 65 m、高さ７～８ｍの石垣で、天端は幅５ｍ程度の平坦面があります。この石垣に膨らみがみられたため、膨らみの部分を中心に石垣の解体修理を行うこととなりました。

解体を行う石垣について

①江戸時代の文献から

石垣は、現存する最も古い津山城の絵図である正保の城絵図（1645 年頃）にも描かれ、後世の絵図にもその描写があることから、築城時から存在していた石垣であると考えられます。元禄 10 年（1687）頃のものとされる絵図には、現在ある石垣と同じ様相の石垣が描かれており、上には塀が築かれていたことがわかります。石垣は「高さ四間半」（約 8.5 m）とあり、その下には「稲荷宮」（現在の千代稲荷）が描かれています。

文献等からは、明和６年（1769）に「太鼓櫓下」の石垣が長さ 10 間、高さ５間にわたって崩落し、稲荷宮の玉垣や建造物に被害が及んだという記述がみられます。具体的な位置はよく分かりませんが、「太鼓櫓の下にある石垣」は、今回修理工事を行う二の丸東側石垣のことを指している可能性が高いといえます。

②昭和の記録から

次に崩落の記録がみられるのは約 200 年後の昭和 39 年（1964）で、この年の集中豪雨により幅 24.5 mにわたり石垣が崩落しました。翌 40 年から 41 年にかけて石垣は積み直しが行われましたが、積み直しの際に、崩落していない部分との間に段差を残したことから、結果的に膨らみのある石垣の石尻が表出することとなりました。当時の修理工事では、津山城の石垣として使われている凝灰岩の他に、部分的に花崗岩が使用されています。

「津山絵図」に描かれた二の丸東側石垣

昭和 40・41 年の石垣修理工事写真１

修理工事によって生じた段差（矢印）

石垣上面（天端）の発掘調査成果について

①石垣北側内側の石積みについて

北側の部分で、内部に石積みのあることが確認されました（右の写真）。石積みは、解体する石垣から約３ｍ内側に入ったところで、西に面を向けてみつかりました。

石積みは全長約９ｍで、高さ（地表面からの深さ）は一定ではなく、最も深いところで石が６段から７段（２ｍ強）積まれていますが、南側では最上段の１段しかみられないところや、間に石がないところもあります。石積みは北へ続き、北側にある石の階段部分（雁木（がんぎ））に接続しています。

この石積みが積まれた目的は何でしょうか？手がかりとなるものの一つに、中段にある細長い石（中央やや右より）があります。これをみると、その上の石と合わせて、算木積みの様相を呈しているようにみえます。算木積みは石垣の隅角部に使われる積み方であるため、この部分がもとは石積みの隅角部であった可能性があります。

過去にこの石積みが地面から上に見えていたと考えると、今回解体を行う石垣北側は独立した石垣であったと推測されます。その場合、地面の高さは当然現在よりも低くなりますが、最下部で確認された地山が北から南に向け少しずつ上がっていることから、石垣のあった時は現在のような階段（雁木）はなく、北から南に向かってスロープ状に上がっていた時期があった可能性があります。

スロープを埋めて階段にした時に改修が行われ、このとき石積みは埋められたと推測されます。その時期は明確ではありませんが、江戸時代の瓦が埋土の下の方からも出土していることから、築造時期ではないと推測されます。

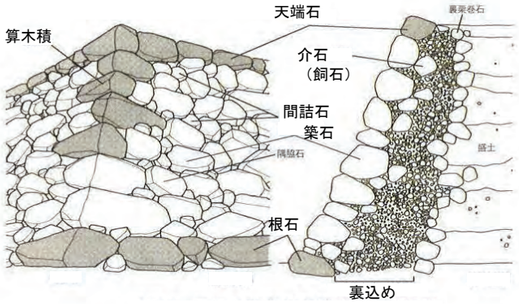
②石列について

石垣の入隅（内側に折れ曲がっているところ）から南側にかけて石列が確認されました。石列は解体する石垣の内側約 1.8 ｍのところで８個が並んだ状態で確認されました。残っていた石列は全長５ｍで、昭和の修理部分のところでなくなっています。

石列は、天端面がよくそろっていることから、石垣上に築かれた土塀の基礎になり可能性が考えられますが、今のところ明確な用途は分かっていません。解体する石垣の上面から 40㎝程度低くなっているので、本来は土塀に向かって階段状に何段か石が置かれていた可能性もあります。これについては今後の発掘調査により明らかにしていく予定です。

③石垣の南側部分について

大半が昭和４０年、４１年に積み直しを行った範囲であり、この部分についてはかなり大きめの凝灰岩を裏込めとして使用していることが確認されました。これは、崩落した石のうち、昭和の修理において表面の石（築石）として使用しなかった石を石垣の裏込めとして利用した結果と推測されます。花崗岩は、この使われなかった石のところに多く用いられたと考えられます。



石垣を構成する石の各部名称

石垣の解体作業について

①石垣の解体前に行う主な作業

・石垣面の清掃　・番号付け　・メッシュ（方眼）の設置　・丁張りの設置

②解体時に行う作業

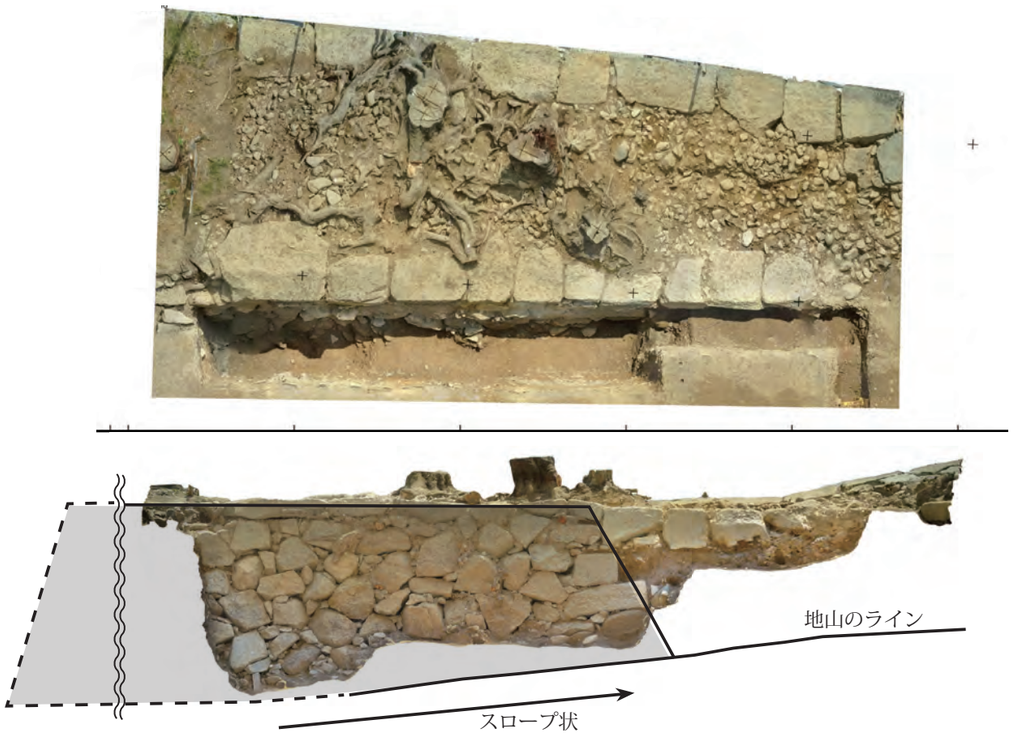
・築石一つずつの写真撮影（周辺石との位置関係の把握）、寸法、重量

・取り外しの際の石材（築石）の下にみられる石の接点や飼石（介石）の状態の記録

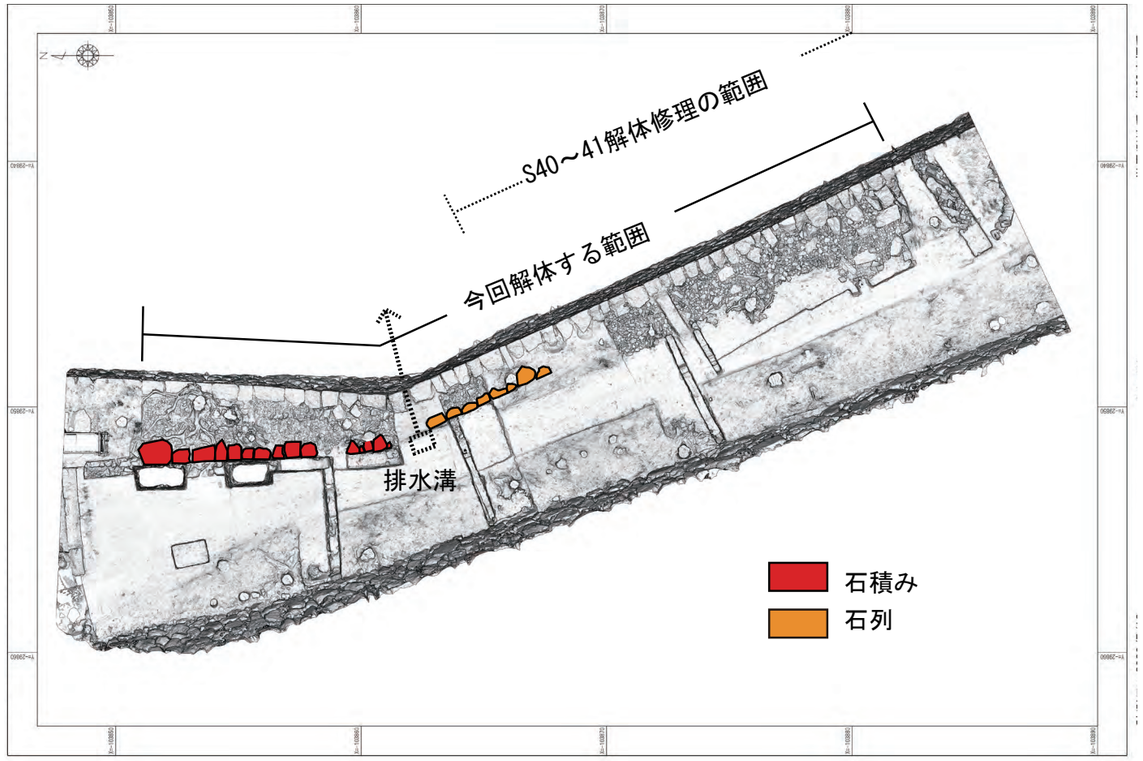
・破損状態の確認

などを調査し、これらを記録した石材調書を作成。

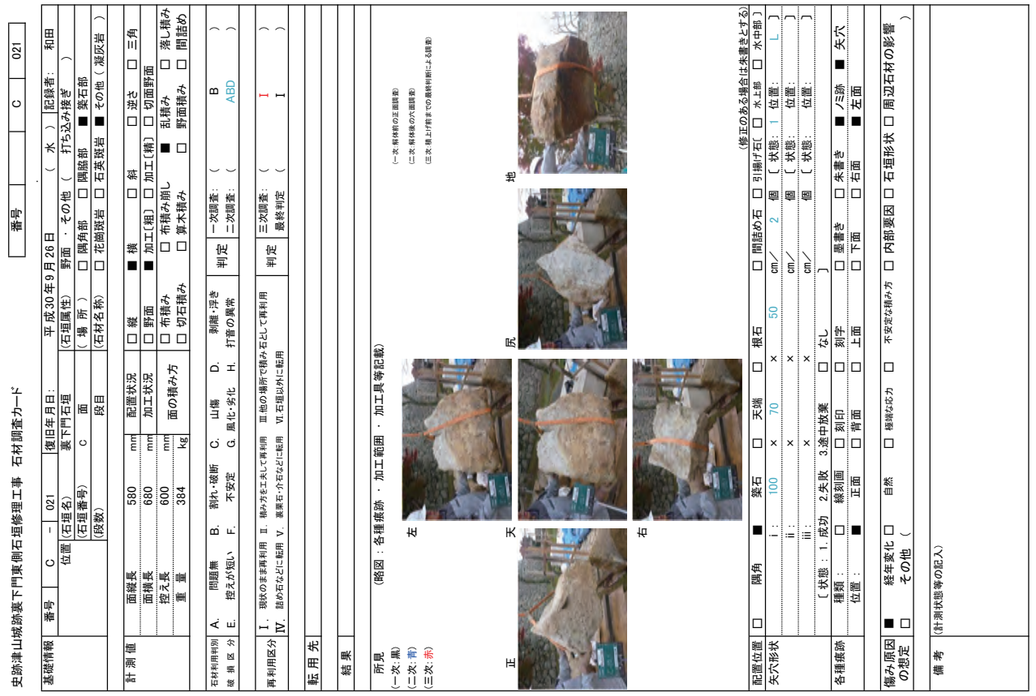
※飼石（介石）…石材の固定を目的として、控え（奥行き）の中程や末端（石尻）に据える石のこと。



石積みオルソ写真（※転載禁止）



今回の調査で確認した遺構（※転載禁止）



石材調書の例